

【書評・紹介】

平田 昌弘 著 『ユーラシア乳文化論』

(東京, 岩波書店, 2013年3月, A5判, xiii+485頁, 9800円+税)

平田 昌弘

乳文化という学問領域が、どれほど牧畜の議論ができるのか。本書をまとめようと思った動機はここにある。

牧畜論は、梅棹忠夫や福井勝義、谷泰らによって提出され、これまでに様々に議論されてきた。梅棹(1976)は、「搾乳と去勢の発明により牧畜という一つの生業形態が成立した」と仮説をたてる。福井(1987)は、「動物の群を管理し、その増殖を手伝い、その乳や肉を直接・間接に利用する生業」と牧畜を定義化する。これらは牧畜の核心を射抜いているのか、乳文化の視座から検証を重ねていく必要がある。また、福井(1987)や稲村哲也(1995)は、牧畜を類型分類するためのモデルを提出している。これらの牧畜の類型分類モデルも、乳文化が牧畜を成立させたのであるから、乳文化の視座から捉え直すことが可能であるはずであり、議論の対象となってくる。

本書は乳文化論であるため、多頁にわたって乳加工技術と乳製品利用を具体的に説明することになる。乳加工技術の記述と分析には、乳加工体系という捉え方が一貫して採用されている。牧畜民の乳加工技術は、生乳がバターに、バターがバターオイルに加工されるように、乳製品が次の乳製品へと加工されている。この特徴をいち早く捉えたのは梅棹(1955)であり、乳加工の全体像を体系として把握すべきであるとして、乳加工体系の概念を提唱したのである。これを旧大陸全体における乳加工体系の比較分析ツールとしたのが中尾佐助(1972)であった。中尾は、乳加工体系を大きく4つの系列群に類型分類する。以後、牧畜民の乳文化研究は、この体系的理解へと進んでいく。中尾モデルは、牧畜民の乳加工技術の特徴を整理できる定規を用意すると共に、乳加工技術の進歩発展の歴史を解き明かし、人類史の再構築にまで迫れる視点が奥深いところである。しかし、中尾モデルは事例研究の限られた状況下での構築であったため、その有効性を具体的事例をもって検討しなくてはならないことが課題として残されていた。この乳文化研究における大きな概念となった中尾モデルの乳加工体系・系列群分析法を、具体的な事例を基に検証することも本書の目的の一つである。

本書の目次は以下の通りである。

- 第1章 乳文化論と牧畜論
- 第2章 西アジア地域の乳文化
- 第3章 南アジア地域の乳文化
- 第4章 北アジア地域の乳文化
- 第5章 中央アジア地域の乳文化
- 第6章 チベット高原地域の乳文化
- 第7章 ヨーロッパ地域とコーカサス地域の乳文化

表紙画像

第8章 「ユーラシア大陸における乳文化の一元二極化」仮説の提起

第9章 乳加工体系・系列群分析の再考：中尾佐助モデルの再考

終章 乳文化論から牧畜論へ

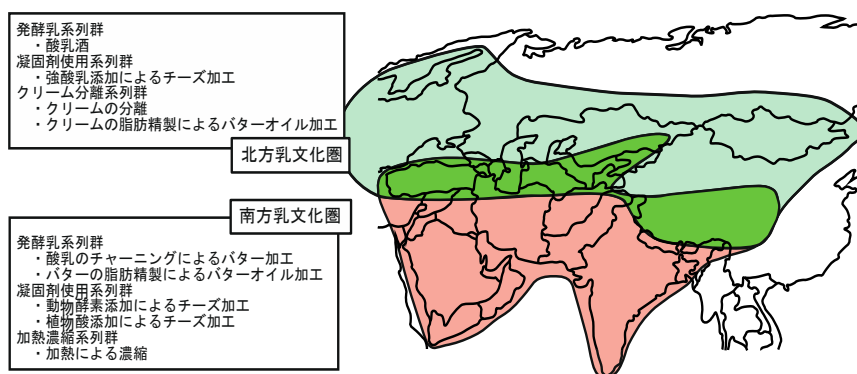
ユーラシア大陸乾燥地帯で牧畜民と生活を共にしていると、牧畜の中心に乳文化があることに気づかされる。この事実が、乳文化の視座から牧畜を再考しようとする立場の拠り処である。牧畜民は、家畜は生きたままなるべく留めさせ、乳を副産物的に得て、生活を成り立たせようとする。これが生業としての牧畜論の基層を成す。その戦略、つまり、乳をより多く得るための技法として、多くの雄畜の淘汰、選ばれし雄のみを残す育種・選抜、乳を搾り取るための母仔畜の分離技術などが発達してきた。結果的に、仔畜を宿営地の近くに係留して間接的に成畜群をも近くに留める技術が生み出され、管理された家畜群が成立することになる。第1章では、この乳文化と牧畜の関係、牧畜の諸理論、家畜化と搾乳（牧畜）の起原時期推定に関する諸理論、中尾モデルの乳加工体系・系列群分析法の説明と記述方法のルール化、乳・乳製品や乳加工技術に関する科学を論じている。本書に当れば、牧畜民の乳文化を調査研究するための基礎知識が得られることを志した。更に、地域の個性をも説明できることになる文化伝播・変遷フィルター、乳加工体系を簡略的に記述するためのツールである乳加工要素といった新しい概念を提起し、その有効性を本書で問うている。

モデル分析という手法は、焦点を合わせている視点に関しては鋭く決るが、対象から漏れる影の部分の弱みをも内包しているものである。乳加工体系・系列群分析法という捉え方は、牧畜民の乳加工技術を優れて特徴把握できるが、それ以外の多くの重要な項目を検討できないのははずである。その一部として、乳加工体系の内部構造把握と民族間比較分析にも堪えられる視点を、乳加工要素という概念（人が乳に働きかける一つのまとまりを意味しており、象徴的な語彙をもって乳加工技術を表現するため、簡略化して乳加工体系を記述・説明することができる単位）を導入し、第9章で中尾モデルを再検討している。その他の欠点も未だたくさん残されているはずであり、乳加工体系・系列群分析法の視座に対してのご批判を受けねばならぬところである。

更に、牧畜論や乳加工体系論については、諸外国の理論や具体的事例を十分にはレビューできていないことであろう。本書での理論展開を反駁するような理論も、存在しているかもしれない。ただし、新大陸のリヤマ・アルパカ牧畜においては乳利用が欠落したまま牧畜が発達しているが、この点については、終章で取り上げて議論している。

第2章から第7章は、地域ごとの乳文化の事例研究となる。いずれの事例も、乳加工体系・系列群分析法に則って記述し、分析している。事例の説明が長く続き、冗長さは拭いきれないが、本書後半部分の仮説構築と牧畜論検証を楽しみに、苦勞して丁寧に記述を展開している。事例紹介では、本書を手に入ればユーラシア大陸の各地域の乳加工体系の特徴が把握できることを意識してまとめていった。

技術が伝播する際、それぞれの民族により取捨選択され、伝播する技術と伝播しない技術とが存在し、伝播した先で変遷する技術と変遷しない技術とがある。なぜ、ある技術は伝播し、地域に特有に変遷するのか。この文化の伝播と変遷を決定づける取捨選択装置を私は文化伝播・変遷フィルターと呼び、各章で事例を紹介してから、乳文化を事例に伝播と変遷を決定づける要因について検討している。題材が乳製品であるから、その伝播・変遷の要因としては、



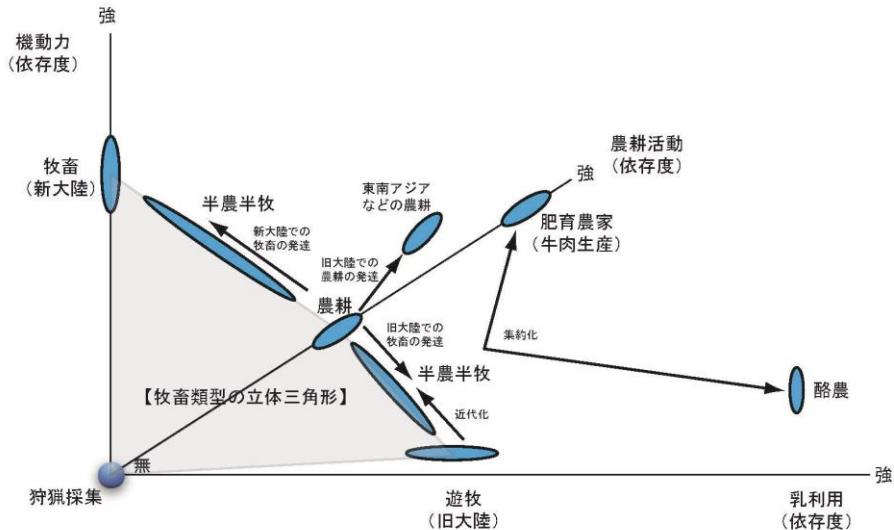
南方乳文化圏と北方乳文化圏 (本書 403 頁)

「冷涼性」「暑熱性」「嗜好性」「定住性」など、生態環境と生業の構造に関わる要因が多く抽出されることになる。つまり、一側面的な文化の伝播と変遷を決定づける要因が抽出されている可能性が高い。題材によって要因が異なるとすると、それは一般性を帯びた要因抽出には到達しておらず、未だ事例研究の域にあることになる。この文化伝播・変遷フィルターの概念に対しても、ご批判を頂きたいところである。

第 8 章では、仮説「ユーラシア大陸における乳文化の一元二極化」論を提起することになる。本書における最大の論点である。事実として、乳文化はユーラシア大陸で南方圏と北方圏とで二極化している。南方圏では、生乳の酸乳化、酸乳の攪拌／振盪によるバター加工、バターの加熱によるバターオイル加工、バターミルクの加熱・脱水によるチーズ加工が特徴的である。これを私は西アジア型発酵乳系列群の乳加工技術と呼んでいる。この他、レンネット凝固剤、加熱濃縮が南方圏では特徴的である。一方、北方圏では、生乳からのクリーム分離、酸乳酒の加工、酸乳自体を凝固剤にしてチーズを加工する技術が特徴となる。これを約 20 年のフィールドワークを費やして検証してきた。この事実、搾乳と乳加工とは西アジアに一元的に起原し、西アジア型発酵乳系列群の乳加工技術まで発達した段階で、西アジアから周辺に伝播し、北方域では冷涼性故に独特に発達していたとする発達史論を重ねたのが、仮説「ユーラシア大陸における乳文化の一元二極化」論である。西アジア型発酵乳系列群は、人類にとっての根源的な乳加工技術ということになる。

本仮説は、過去を遡って推論したものであるため、どれほど検証しても証明し切れるものではない。乳加工の歴史を現在に伝える物的証拠も少ない。今後、本仮説を反駁するようなアンチテーゼが提出されるかもしれない。反論が真実を語っているならば、仮説の修正、もしくは、仮説を棄却しなければならない。しかし、反論は仮説の正当性を補強できる機会でもあり、本仮説に対する質疑応答が今後の課題となる。

終章では、乳文化の視座から牧畜論を再考している。乳製品の栄養摂取の視座から梅棹の牧畜論を検討し、「搾乳と去勢の発明により牧畜という一つの生業形態が成立し、乳・乳製品の利用が食料摂取を栄養学的に補完し、生業戦略の幅をもたせた」と解釈し直している。牧畜の類型論モデルでは、農耕から牧畜が発展してきた背景、新大陸での乳を利用しない牧畜の存在



乳利用、農耕活動、外部社会に対する輸送力を軸とした牧畜類型の立体三角形 (本書 444 頁)

を鑑み、乳利用軸、農耕活動軸、機動力軸の3つから類型分類を試みている。この類型分類モデルは、その立体構造の形態から「牧畜類型の立体三角形」と命名した。この牧畜類型の立体三角形モデルに、狩猟採集、農耕、半農半牧、遊牧、新大陸の牧畜を当てはめると、それぞれの生業の位置と発展の方向性について優れて検討することができる。この牧畜類型の立体三角形から福井の牧畜論を解釈し直すと、「牧畜とは、自然環境・立地条件に応じて農耕活動もしくは農産物に依存しつつ、家畜の群を管理し、その増殖を手伝い、その乳や肉などの畜産物、もしくは、家畜の機動力を直接的・間接的に利用し、生活の多くを家畜飼養に依存し、生活に必要な十分なだけの家畜を屠殺して畜産物を利用したり家畜・畜産物を交換／売却したりして生活を成り立たせる生業（生活の形）」となる。

本書は、乳文化論、および、乳文化の視座からの牧畜論考である。仮説や新しいモデルを提起していることから、厳しいご批判も受けることであろう。しかし、批判を通じて乳文化論・牧畜論の検討が進めば望外の喜びである。ここに覚悟して、本書を送り出している。

参考文献

稲村哲也

1995『リャマとアルパカ —アンデスの先住民社会と牧畜文化』花伝社.

梅棹忠夫

1955「モンゴルの乳製品とその製造法 —乳をめぐるモンゴルの生態 (III)」『内陸アジアの研究』3: 217-296.

1976『狩猟と遊牧の世界』講談社.

中尾佐助

1972『料理の起源』日本放送出版協会.

福井勝義

1987「牧畜社会へのアプローチと課題」福井勝義・谷泰(編)『牧畜文化の原像 —生態・社会・歴史』日本放送出版協会、3-60頁.

(ひらた・まさひろ／帯広畜産大学)